

令和元年度第 2 回 農業研究センター（本部）所長表彰 受賞者

【第 1 回】

	所属		職	氏名	表彰日	表彰区分	事績 該当号	事績の内容
1	病害虫防除部	病害虫防除課	主任主査	遠藤 歩美	R2年 2 月	個人	第1号	【チェックシートの活用で正確なネット情報発信】 アグリベンチャーネットを活用して提供する予察情報等について、ホームページへの登録作業上生じる記載ミスや添付ファイルの不備等、リスク回避のためのチェックシートを考案し、当該チェックシートを活用して、複数の職員によって公開前に内容を十分確認する体制を整備し、間違いのない正しい情報提供を実現している 職員のこの取組は、チェック体制の構築に大きく貢献したことは勿論のこと、内部統制の推進上、所属職員や他の組織に対する模範となるもの
2	病害虫防除部	病害虫防除課	主査	吉田 雅紀	R2年 2 月	個人	第1号	【農研センター内のルールを作成して防除指針作成事務の円滑化に貢献】 「岩手県農作物病害虫・雑草防除指針『防除指導資料(案)』」の作成にあたり、センター内の調整等、これまで明確にされていなかった役割分担や事務手続きのフローを整理し、同指針策定要領上、農研センターとは異なる立場で役割が規定されていた「病害虫防除所」が「病害虫防除部」としてセンター内横断的な調整機能を発揮するための新たなルールを提案し、2019年度指針作成に係る円滑な事務処理と適正性の確保に貢献した 職員のこの業務姿勢は、内部統制の推進上、組織、職員の模範となるもの

【第 2 回】

	所属		職	氏名	表彰日	表彰区分	事績 該当号	事績の内容
1	企画管理部	研究企画室 総務課	主任 主査 主査 主任	◎ 坂田 真樹子 長澤 睦 阿部 敦 土屋 淑子	R2. 2. 18	グループ	第2号	【「会計年度任用職員」制度への円滑な移行に対する貢献】 令和 2 年 4 月から「会計年度任用職員」制度が導入されるに当たり、人事課等から必要な情報を収集するとともに、センター内において制度の説明、関係室課との調整、任用手続を進める等、新制度への円滑な移行に尽力した。
2	生産基盤研究部	生産システム研究室	上席専門研究員	永富 巨人	〃	個人	第1号	【令和元年岩手県産水稲の生育経過の特徴と作柄・品質に影響した要因の解析及び水稲品種「銀河のしずく」の生育予測パラメータ策定】 本年度の水稲生育経過と作柄・品質の成立要因を気象経過と合わせて解析を行った。また、県オリジナル品種「銀河のしずく」の幼穂形成期及び出穂期を予測するパラメータを生育指数数(DVI)を用いて策定し、栽培適地判定の基礎データ算定に活用された。
3	生産基盤研究部	生産システム研究室	専門研究員	小原 あつ子	〃	個人	第1号	【岩手県における水稲高密度播種苗の播種量及び育苗日数の検討】 水稲のコスト低減の手法として注目され、県内で導入が進んでいる高密度播種苗について、「ひとめぼれ」及び「たわわっこ」の播種量及び育苗日数を明らかにした。
4	生産基盤研究部	作物育種研究室	主査専門研究員	小舘 琢磨	〃	個人	第1号	【気孔コンダクタンス値を用いた水稲多収系統の選抜方法】 多収育種における光合成能力評価の重要性に着目し、光合成速度と直線関係にある気孔コンダクタンス測定値と収量との間に正の相関関係があることを見出し、圃場における簡易型測定器を用いた出穂20日後の気孔コンダクタンス測定により、光合成能力の高い多収性系統を選抜できる可能性を示した。
5	生産基盤研究部	水田利用研究室	主任専門研究員	及川 光史	〃	個人	第1号	【岩手県中南部におけるアメリカサガオの防除方法】 岩手県中南部の大豆は場で発生が拡大してきている難防除雑草のアメリカサガオについて、茎葉処理剤の体系処理を検討し、効果的に抑制することを現地において実証した。
6	生産基盤研究部	水田利用研究室	主査専門研究員	齋藤 智子	〃	個人	第1号	【令和元年度台風第19号による大豆の冠水被害】 台風第19号に伴う大雨・洪水により冠水した大豆について、農業普及技術課革新支援担当、現地普及センターと連携して調査を行い、収穫直前の冠水被害が大豆の生育・品質に及ぼす影響を試験研究成果としてとりまとめた。
7	園芸技術研究部	野菜研究室	主査専門研究員 技師	◎ 田代 勇樹 佐藤 春菜	〃	グループ	第1号	【きゅうり先端肥大症発症助長要因の解明および発症軽減対策技術の確立】 きゅうり先端肥大症は受粉による影響を強く受け、高温等により開花から収穫までの日数が短い場合に発症が助長されることを明らかにした。 また、鮮度保持フィルム(FHフィルム)を出荷箱内包装に用いることで、発症を軽減することができ、その効果は予冷と併用することでさらに高まることを明らかにした。
8	園芸技術研究部	南部園芸研究室	専門研究員	鈴木 朋代	〃	個人	第1号	【「いちご低温カット栽培における極晩生いちご品種「そよかの」の特性」及び「いちご促成栽培における種子繁殖型品種「よつぼし」の各栽培体系の導入効果」の解明】 本県が共同研究により育成した極晩生いちご品種「そよかの」が低温カット栽培において、県奨励品種よりも多収、大果で商品果の揃いに優れることを明らかにした。 また、種子繁殖型いちご品種「よつぼし」は、定植までの作業労働時間が慣行に比べ大幅に削減可能であり、二次育苗法の総収量は「さちのか」より多く、所得が倍増する。そして、本圃直接定植法は他品目との組合せ栽培が可能である。
9	園芸技術研究部	花き研究室	専門研究員	小澤 傑	〃	個人	第1号	【新奇性の高い鉢花向け八重咲きりんどう「いわてDFG PB-1号」の育成】 主に敬老の日のギフト用として定着している鉢花りんどうのイメージを変える新奇性の高い青色系八重咲き品種を育成した。

	所属		職	氏名	表彰日	表彰区分	事績 該当号	事績の内容
10	園芸技術 研究部	果樹 研究室	専門研究員	西田 絵梨香	〃	個人	第1号	【ぶどう「サニールージュ」の省力的な無核化技術の確立】 「サニールージュ」は、無核、良食味で消費者ニーズにマッチしたぶどう品種で、栽培面積が拡大している。しかし、ジベレリン無核化処理及び整房は、短期間で完了しなければならず多くの労力が必要とされていた。そこで、満開予定14日前にジベレリンの早期処理を行うことで、摘粒作業等を省力化するとともに熟期を促進することができる技術を開発した。
11	生産環境 研究部	土壌肥料 研究室	上席専門研究員	高橋 良学	〃	個人	第1号	【土壌の可給態窒素に基づく雨よけトマトの窒素減肥技術及びマイクロ波抽出と簡易測定キットによる土壌蓄積養分の簡易評価手法】 雨よけトマトにおける可給態窒素量を評価した窒素の減肥技術について研究成果をとりまとめた。 加えて、可給態窒素を含めた3つの土壌診断項目を1回の抽出で測定できる評価手法を確立し、研究成果としてとりまとめた。
12	生産環境 研究部	病理昆虫 研究室	技師	佐々木 陽菜	〃	個人	第1,2号	【水稲・大豆の優良種子供給に向けた植物病理学的なモニタリング業務の取組】 水稲と大豆の優良種子供給の根幹となる原種・原原種において、植物病理学的な見地から健全性をモニタリングする業務に精力的に取り組み、病害の発生リスクの把握や対策技術の提示により種子品質の向上に貢献するとともに、県産米及び大豆の高品質・安定生産に寄与した。
13	病害虫 防除部	病害虫 防除課	主任主査	◎ 猫塚 修一	〃	グループ	第1号	【的確な発生予察と高いリーダーシップでイネ細菌病類の被害軽減に大貢献！】 採種圃産水稲種子のモニタリング調査を実施し、細菌病類の検出率が高いことを突き止め、細菌病類が大発生した平成24年並みに水稲苗への被害多発が懸念されたことから、「注意報」を発表し、農業革新支援担当等と連携して、育苗シーズンより早い段階から普及センターやJA等現地指導者による徹底した対策指導を誘導するとともに、自らも関係機関・団体と一体となって県内主要な育苗施設を巡回指導する等、徹底した啓発活動を精力的に実施した。 これらの取り組みによって、各地で適切な防除が実施された結果、被害発生は当初の予測を大幅に下回った。 (被害面積:51ha、参考H24:145ha)
14	病害虫 防除部	病害虫 防除課	主任主査	◎ 名久井一樹	〃	グループ	第1号	【緻密な要因解析に基づく防除対策の提示でリンゴ黒星病による被害軽減に貢献！】 近年の県北・県中部を中心とした広域的なリンゴ黒星病の発生要因が感染好適日の早期出現による防除のタイミングのズレであることを突き止め、同要因に基づく防除対策(体系)を農業革新支援担当と連携して普及センターやJA指導者に提示することにより、今年度は適正な防除が徹底され、黒星病による被害は前年度を大幅に下回った。 (被害面積:79ha、H30:162ha)
15	病害虫 防除部	病害虫 防除課	主査	◎ 佐藤 千穂子	〃	グループ	第1号	【ネギ葉枯病(黄色斑紋病斑)における発生特徴の解明と防除対策の実践指導】 ネギの出荷部位に被害を及ぼすことから近年生産現場で問題となっていたネギ葉枯病(黄色斑紋病斑)を対象とした2か年に渡る調査により、本病斑が多発する特徴を明らかにした。 さらに、発生特徴に基づく防除対策を考案し、次年度の防除指導に反映されるよう、農業革新支援担当と連携し、農業普及員やJA営農指導員等現地指導者と対策の内容を共有した。
16	病害虫 防除部	病害虫 防除課	主任主査	◎ 遠藤 歩美	〃	グループ	第1号	【東北各県に先駆け果樹カメムシ類の新たな発生予察手法を開発】 病害虫防除所が蓄積した過去20年間の集合フェロモントラップ調査データを統計解析し、りんごの果実被害をもたらす夏期のチャバネオカメムシ新成虫の多発生を早期に予測可能な判断基準を設定した。 さらに、各農業改良普及センターが実施している集合フェロモントラップ調査手法にも適用可能な判断基準も同時に設定した。 この取組みにより得られた成果は、東北各県に先駆けて開発した新たな発生予察手法として、次年度から病害虫防除所の発生予察に活用することにより、精度の高い発生予察が期待される。
17	病害虫 防除部	病害虫 防除課	主査	吉田 雅紀	〃	個人	第1号	【大豆子実害虫の新防除体系確立に向け「ホソヘリカメムシ」の発生生態を解明】 大豆子実害虫のうち、発生予察上、今後重要視すべき加害種を「ホソヘリカメムシ」に絞り込み、さらに野外観察と室内飼育並びに薬剤感受性試験の結果、年間1～2世代の発生とする過去の文献記録とは異なり、年間3世代を経過する可能性があること、殺虫効果の高い薬剤を明らかにした。
18	病害虫 防除部	病害虫 防除課	主任主査	猫塚 修一	〃	個人	第1号	【2年連続の快挙！「北日本病害虫研究会賞(研究報文部門)」を受賞】 候補者の論文が「第12回北日本病害虫研究会賞(研究報文部門・病害分野)」を受賞することが決定。候補者が同賞を受賞するのは、前回(第11回)に続き2年連続の受賞となる。 平成30年度から論文の内容を活用した発生予察を開始し、従前より早くリンゴ褐斑病の予察情報を提供できるようになり、被害軽減に大いに役立っている。